

おくのほそみち		
～ ‘リハビリテーション論’ の確立に向けて ～		11
		理学療法士 奥野 景子

大学生の時、テスト勉強と言われるものが嫌いだった。もちろん、テストの為だけに勉強する部分もあったが、それは面白くも楽しくもなかった。

「ちょっと気になることがあるから、図書館で勉強してるわ～」大学では、ほとんど空き時間がない生活を送っていたが、たまに中途半端に時間ができることがあった。一応、女子大生であったから、友だちにおしゃべりに誘われるのだけれども、当時の私はあんな風に断って、一人で図書館のお気に入りの席に向かった。

当時の趣味は、運動学。今、思うとだいぶイタイ奴…。ただ、面白くて楽しくて仕方なかった。人の身体の構造や機能を学び、それがどのように制御され、どのような戦略の下、どのように動くのかなど、疑問も興味もどんどん膨らんだ。ある日「PT やし、歩行を軸に色んなことを理解してみたい！完璧に理解できたら、全部のことがわかるはずや！！」と思いつき、歩行を理解するための勉強を始めた。とりあえず歩行周期からと思って本を開いたら、関節の動きや筋活動、重心移動の話が出てきた。そして、まずは関節の構造からと勉強を始めた。ただ、気が付いた時には細胞の構造についてノートにまとめ、わくわくしながらナトリウム-カリウムチャンネルのことを調べていた。「…あれ？歩行はどこにいったんや！？」と気が付いたのは数日後のこと。友だちに相談しても「そんな知らん」と言われた。再び歩行周期の表を見つめてみたものの、もうそれまでのわくわく感はなかった。

冒頭の話は、もちろん私のこと。趣味が運動学だった時期は、休日に遊びに誘われても片道二時間弱掛けて大学の図書館に行った。‘自分の趣味は運動学’ と思ってしまいうほど、何もわかっていない身の程知らずだった。そして現在、ある意味、今も身の程知らずな部分は変わっていないのかもしれない。私は、自分なりにリハビリテーション論を確立したいと思っている。しかも、ある程度、多くの人に伝わるようなものに

したいと思っている。今回は、このことについて書いてみようと思う。

1. ‘リハビリテーション’ は、 ワカラナイ…？

『対人援助学マガジン第25号「リハビリテーションのこと」』に‘リハビリテーション’ に対する疑問について記載した。簡単に要約すると「リハビリテーションって運

動や訓練をイメージする人がいるけど、それって違うよ」、「リハビリテーションには‘全人間的復権’っていう理念があるよ」、「でも、‘人間ってなに？どうやって復権するの？’ってことについては、あまりちゃんと考えられてないんじゃないの？」、「結局、リハビリテーションってよくワカラナイ…」、「でも、リハビリテーションについて考えることって大切だと思うから頑張ろう」って感じです。詳細は、実際のマガジンをご参照ください。

リハビリテーションについて考えるためには、大きく分けて二通りの道筋があると思っています。一つ目は、人間って？生きるって？生活って？社会って？倫理って？なんで奪われちゃうの？どうやって与えられるの？それって本当？医療って？福祉って？……などと、ボトムアップ方式に積み上げていく道です。ここに挙げた以外にもリハビリテーションにおける様々な分野、その周辺や根底にあること、一つ一つに関して考えることは大切かつ必要不可欠だと思います。例えば、職業リハビリテーション、リハビリテーション医学、リハビリテーション工学、生命倫理、社会学、などなど。一つ一つに関して丁寧に見ていくことで、リハビリテーションがどのように構成されているのか、どのように枠づけられているのかといった、その輪郭が見えてくるのではないかと考えています。これを「**省察するリハビリテーション**」と仮に名付けます。リハビリテーションが自分自身のことを省察し、自身について考えるイメージです。

二つ目は、トップダウン方式で考えていく道です。これは、俗に言う‘リハビリテ

ーション’の現場にいる医療従事者が、そこで起きていることから、そこにはどのような要素や課題があるのかを考える方法です。これを「**省察的実践家のリハビリテーション**」と仮に名付けます。現場で働く省察的実践家が自身の現場やそこで起きていること、自分自身を省察し、そこにあるリハビリテーションを浮き上がらせるイメージです。

次では、上述した道筋についてもう少し考えていきたいと思います。

2. 「省察するリハビリテーション」について

上述したように「省察するリハビリテーション」は、リハビリテーションが自分自身や周辺のことを省察し、自身について考えるイメージです。

とにもかくにも、私は「おい、リハビリテーション！！しっかり自分のこと振り返らなあかんで！！」と言ってやりたい。第25号のマガジンにも書いたが、リハビリテーションは、輸入された言葉で日本語訳がない。今まで、これを日本語に訳そうとした人もいないんじゃないかと思う。「本当にそれで良いのか？リハビリテーションよ！！本当にそれで良いの？リハビリテーション職者たちよ！！」と、強く思う。

リハビリテーションと付く言葉には前述したもの以外にも、地域リハビリテーション、リハビリテーション看護、医学的リハビリテーション、教育リハビリテーション、社会リハビリテーション、総合リハビリテーションなど、ここに書ききれないほどある。まだ私が知らない言葉もあるだろうし、

また新たに作られる言葉も出てくるだろうし、その全てを私が知る由もない。ただ、それでも、それがリハビリテーションに関わる何かであるのならば、それが何を表すのか、意味するのかを知りたいと思う。どんどん膨れ上がっていくであろうリハビリテーションと言う言葉に振り回されないように、地に足をつけて、それを追いたいと思うのです。

そして、リハビリテーションの周辺、根底には、それと輻輳するように倫理や文化人類学、社会学などが存在しています。各々の立場から見てみると、リハビリテーションはまた違った表情を見せるように思う。ただ、それもまたリハビリテーションであり、それもまたリハビリテーションには必要不可欠な存在なのだと思います。

考えるだけで埋もれてしまいそうな感覚が湧き上がるが、飲み込まれないように足掻き、着実にリハビリテーションのかけらを集め、創りたい。

3. 「省察的実践家の リハビリテーション」について

3-1. 省察的実践家とは？

省察的実践家は、新たな専門職モデルとしてドナルド・ショーンが提唱したものである。佐藤（2001）は、彼が書いた「The Reflective Practitioner : How Professionals in Action」を翻訳した本の訳者序文で、省察的実践家は「クライアントが抱える複雑で複合的な問題に『状況との対話（conversation with situation）』にもとづく『行為の中の省察（reflection in action）』として特徴づ

けられる特有の実践的認識論（practical epistemology）によって対処し、クライアントとともにより本質的でより複合的な問題に立ち向かう実践を遂行している」と説明している。また、ショーンが意味する行為の中の省察について、状況との対話として遂行される活動中の思考に限定されるものではなく、実践の事後に出来事の意味を振り返る「行為の後の省察（reflection after action）」や実践の事実を対象化して検討する「行為についての省察（reflection on action）」を含んでいると述べている。

誤解を恐れずに要約すると、省察的実践家は「クライアントが抱える複雑で複合的な問題にクライアントと共に立ち向かう専門職者であり、その実践は状況や相互作用としての行為に対する省察によって行なわれる」と言えるのではないだろうか。さらに、省察は実践中に限定されるのではなく、実践後に行なわれる省察や実践そのものに対する省察も含むと思われる。実践後に行なわれる省察は臨床後の「ああ～、あの時どうしたら良かったんかなあ…」というフツフツした感じがその一例であり、実践そのものに対する省察は症例検討がその一例になるとように思う。

3-2. 自分への不満

話はやや唐突だが、私は自分自身のことを省察的実践家だと思っている。そして、上述した「省察的実践家のリハビリテーション」は、私の修士論文の副題の一部にもなっている。修士論文では、私が今まで行なってきた実践を題材に、それがどのような省察によって創造されて

いたのかを記述し、それ自体についても振り返りを行なった。そして、リハビリテーションの現場における省察的実践を省察することで浮かび上がってきた視点について検討し、リハビリテーションにはどのような課題や要素が含まれているのかを記述した。

実際に修士論文の中でリハビリテーションの課題やその要素として挙げたのは、教育、パターンリズム、インフォームド・コンセント、リハビリの対象、痛み、医学的情報の重要性、身体を介した会話、‘今ここ’の重要性、当事者に挑む姿勢、社会の医療化、以上10点になる。修士論文では、各々について自分なりの考えを書いた。そして、最終的に行きついたのは、「リハビリテーションは『‘今ここ’を‘生きること’の支え』になる」ということだった。ただ、これもまだ、まだまだ足りない。もっと、もっとそこには多くのことがある。もっと良い表現はないのか？見落としていることはないのか？もっと大切なことはないのか？もっと、もっともっと、……………

4. ‘省察的実践家’として ‘リハビリテーション論’の 確立に挑む

私は、省察的実践家として「省察するリハビリテーション」の背中を押し、省察的実践家として「省察的実践家のリハビリテーション」を蓄積し、そこにある課題や要素に向き合っていきたい。そして、そこに浮かび上がるリハビリテーションからリハビリテーション論を導きたい。『‘省察的実

践家’として‘リハビリテーション論’を確立する』これが私のやりたいことなのだと改めて確信した。

～ 終わりに ～

今回のマガジンでは、大学院を修了してからずっと胸の中でモヤモヤしていたことを言葉にしてみたはじめての歩的な感じになるのだと思う。

障害受容という言葉が嫌いだった。自分がやっていることや今のリハビリテーションが進もうとしている方向がリハビリテーションであるのならば、そんなことはやりたくないと思った。理学療法士を辞める決意をして大学院に入学した。そこで、自分は理学療法士としてリハビリテーションに取り組んできたことに気が付くことが出来た。私が理学療法士として出会った人たちにとって、私との時間が「‘今ここ’を‘生きること’の支え」になったのかはわからない。でも、私はそういう姿勢でその場に臨んでいたのだと思う。

今の私は、自信を持って自分のことを理学療法士だと言うことが出来る。決して‘出来る理学療法士’ではない。だけど、私は理学療法士だ。だから、ちゃんとリハビリテーションについて考えるし、考えたいし、考え続けていく。今回のマガジンは、理学療法士としての決意表明になったように思う。

引用文献

Donald A. Schön (1983)『専門家の知恵 反省的実践家は行為しながら考える』（佐藤学,秋田喜代美訳）ゆるみ出版, 2001, p. 7

さて、ここまでは順調だった。12月上旬から中間テストがあるため、締め切りの二週間前までに短信も含めてマガジンのほとんどは終わっていた。でも、今この文章を書いているのは、11月19日(月)。

なぜか??

マガジン執筆者の一人でもある清武システムズの清武さんにぼろっとマガジンについて話してしまった結果、「ああ～、このままじゃ提出できひんな…」となり、加筆修正をしているという今になる。

まだ整理&理解しきれていない部分が大きいが、清武さんに言われたことの外枠はこんな感じ。

↓↓↓

- ・おくのは、今まで理学療法士としてリハビリテーションに携わってきた。
- ・でも、それだけじゃ補いきれないことがあると感じた。
- ・だから、理学療法士の枠を飛び出して、あんまマッサージ指圧師の学校に飛び込んだんじゃないの？
- ・リラクゼーションサロンに行ってみたり、整形外科を受診してみたり、「身体」に焦点をあてて何かを見ようとしてるんじゃないの？
- ・んで、そのことを通して自分に出来ること、やりたいことを考えようとしてるんじゃないの？

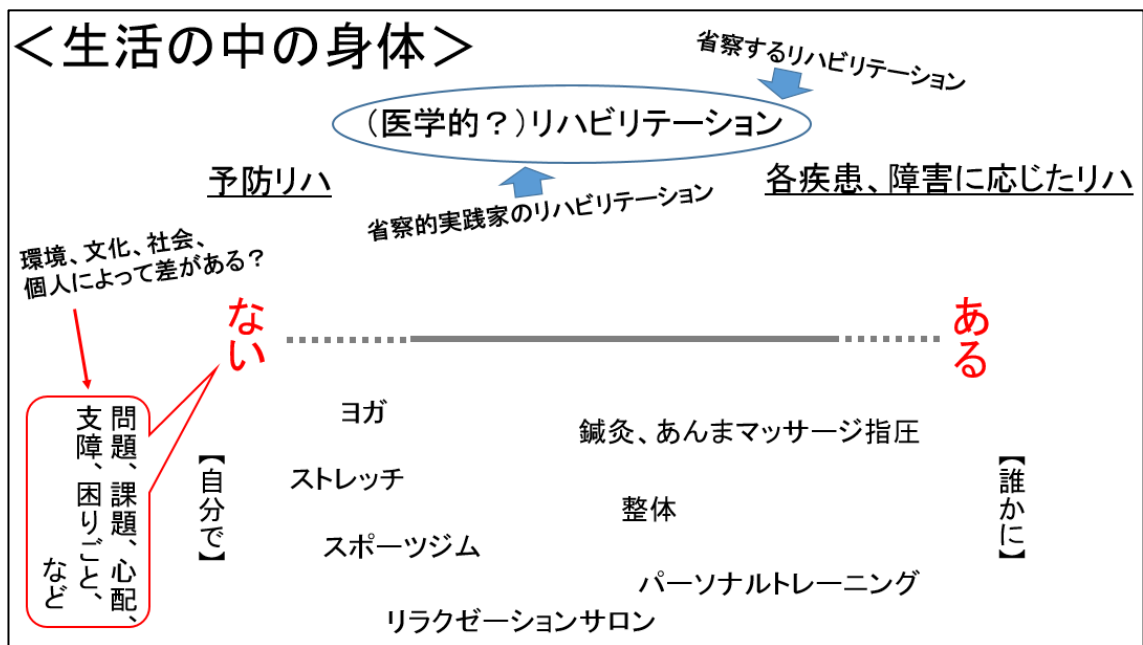
さらっと話したこの数分で「またやってくれたな、清武さん…」となった。話した結果、「そうそう！！それぞれ！！」と明確になったことは一つもない。だけど、「ああ～、このままじゃ提出できひんな…」とは

なった。

彼と出会ってからのこの数年、こんなことが多々あった。修士論文や大学院での授業のこと、仕事のこと、色々なことを話してきた。その中で、私の中にあるまだ言葉に出来ていないこと、気が付いていないこと、まだ何もないと思っていた隙間に入れるべきこと、隠れて見えないこと、色々なことが目の前にほわっと浮かんだ。だからと言って、それを手にとれる訳ではないし、しっかり見えるものではないし、写真に残せるようなものでもない。でも、そこに浮かぶものはあった。そして、その中のいくつかは、後からかたちになっていった。思ってもみなかった道筋から辿り着くこともあれば、少しずつ近付いている感覚を抱くこと、急にポンッと現れることもあった。そして、その多くは、私にとって大切なもの、ことであることが多かった。話した時はよくわからないし、勝手なことを言われても困ると思うこともある。ただ、やはりその多くは、私にとって大切なもの、ことであることが多かった。だから、残しておかなきゃ、覚えておかなきゃとなる。そのために今の私も書いている。(これを書くためには、清武さんとのやり取りについても書かないとおかしなことになると思ったので併せて書いておいた。)周りのみんなはテスト勉強を頑張ってるのに、一人だけパソコンをカタカタしている。

今思い描くことが出来るイメージは、次のページの図のような感じ。。

<生活の中の身体>がテーマで、<横軸>は問題、課題など。そこに輻輳するようにリハビリテーションやヨガなどが存在し



ている感じ。今の私は、おそらく、『今の文化や社会において身体がどのように扱われているのか?』、『そこに至る過程(過去)はどうだったのか?』、『そして、これからどうなっていくのか?』について考えているのかもしれない。また、その中で自分は『どのあたりで、何に対して、どのようなかたち(ポジション?立場?)、どのようなやり方で、どんなことをするのか?』を考え中、模索中なのだと感じている。

ここからどうなっていくのか全くわからない。やっと「おくのほそみち」感が出てきた感じがする。未知過ぎて何とも言えないし、うっすら見えていることさえないが、今抱いている感覚を頼りに「おくのほそみち」を歩いていきたいと思う。

👣 おくのほそみちのこれまで 👣

- 第 24 号 新連載決意表明(「執筆者@短信」にて)
- 第 25 号 リハビリテーションのこと
- 第 26 号 ‘リハビリテーションが行なわれる場’
について考える前に
- 第 27 号 ‘リハビリテーションが行なわれる場’
について考える前に
二歩目; 〇〇〇と私
- 第 28 号 ‘リハビリテーションが行なわれる場’
について考える前に
三歩目; ‘あなた-私’ という関係
によって変わる ‘場’
- 第 29 号 選ぶということ
一歩目; 私の内にある ‘絶対’
- 第 30 号 選ぶということ
二歩目; 理学療法士として①
- 第 31 号 在宅医療について
- 第 32 号 選ぶということ
三歩目; 生き場
- 第 33 号 理学療法士が指圧を学ぶ
- 第 34 号 グラデーションの中で